

まえがき

昭和 27 (1952) 年，戦後，初の国立美術館として，京橋に開館した東京国立近代美術館 (1-2 章)。同年，一歩先んじて同じ京橋の地にブリヂストン美術館として開館し，2020 年，全面リニューアル，名称も改めて開館したアーティゾン美術館 (4 章)。30 年の長き準備室の時代をくぐり抜けて 2022 年の春，まさに本書を用意している今年，満を持して開館した大阪中之島美術館 (3 章)。そして，明治 5 (1872) 年，近代日本の文教施設のほぼすべての濫觴^{らんしょう}とも言える湯島聖堂大成殿の文部省博物館による博覧会から，今年，数えて 150 周年を迎えようとする東京国立博物館 (5 章)。

本書は，国立美術館，公立美術館，私立美術館，国立博物館のそれぞれに個性と語るに十分な歴史を有する 4 館のミュージアムの中のライブラリとアーカイブズについて，現場に軸足を置きつつ語られた報告である。

1 章は，東京国立近代美術館での経験を中心に本書のイントロダクションとなるべく「ミュージアム・ライブラリの 5 つの原理と課題」を述べたものである¹。

2 章は，東京国立近代美術館の本館のアートライブラリにおける取り組みと情報資源の組織化を中心に，M の中の L の様態を幅広く多様に，かつ手堅く述べたものである。

3 章は，大阪中之島美術館に設けられたアーカイブズ情報室での収集と公開をアーカイブズの定義に遡り，ミュージアムにおける機関と収集のアーカイブズの二面にわたって論考し，述べたものである。

4 章は，作品の歴史情報とその資料の集成行為を「ドキュメンタ

シオン」の語に収斂させて、美術館の中の学芸部門における専門職能が、より深い連携をもって協同／協働する姿を述べたものである。

5章は、東京国立博物館の資料館の中においてその役割を異にする情報資料室と百五十年史編纂室と情報管理室から、それぞれにMの中での情報連携へのアプローチを述べたものである。

^{ミュージアム}館の中のライブラリとアーカイブズの連携は、〈内なる〉MLAのトライアングルであるが、かつて同じ構図をRLG/OCLCでの要職を務められたジェームズ・ミハルコ (James Michalko) 氏は、'MLA under same roof' という秀逸なキャッチコピーとイラストで示してくれた。本書においてもしばしば現れるMLAの連携の諸相は、まさに本書の果たす役割の眼目を示すものの中心にある。

MとLとAにはそれぞれに仕事の流儀とマナーがある。その拠って立つ原理は、curatorshipであり、librarianshipであり、archivy²と呼ばれるものである。その原理には当然のことながら差異がある。それぞれがこの原理に則りつつ、かつ相互に連携することが、今日のM・L・Aの可能性をさらに開き、そこにいっそうの愉悦があることをお伝えできれば幸いである。

2022年9月

編著者 水谷長志

引用参考文献・注

- 1：水谷長志「ミュージアム・ライブラリの原理と課題：竹橋の近代美術館での30年から伝えられること／伝えたいこと」『現代の図書館』57(3), 2019, p.107-117を改題して再掲。
- 2：Dictionary of Archives Terminology, SAA, archivy. <https://dictionary.archivists.org/entry/archivy.html>, (accessed 2022-07-03).

ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ
もくじ

「博物館情報学シリーズ」の刊行にあたって ————— 1
まえがき ————— 3

1章 ミュージアム・ライブラリの原理と課題 —— 竹橋の

近代美術館で学んだ5つの命題から ————— (水谷) — 11
はじめに —— 5つの「命題」から学んだこと ————— 11
1.1 ARLIS ファウンダー, TF の命題から学んだこと (1)
—— ^{co-operation} つながること 13
1.2 ARLIS ファウンダー, TF の命題から学んだこと (2)
—— ^{diversity} 多様性 14
1.3 アメリカの AML の先駆者, JW の一生から学んだこと
—— ^{one person librarian: OPL} 一人図書館員の悩みと矜持 17
1.4 NAL, V&A の館長 JvW との対話を通して学んだこと
—— なぜ, ARLIS/Japan ではなかったのか? 22
1.5 AL & AA, MoMA 館長 CP の問いかけから学んだこと
—— 部分と全体: あるいは分担/^{artels}分散と集中^{monoliths} 26
おわりに —— IFLA という傘のもとに ————— 31

▶コラム1 ^{アート・ビブリオグラファー} 美術書誌編集家という生き方 (水谷) 35

2章 ミュージアム・ライブラリ —————(長名)——	40	3.2 ミュージアム・アーカイブの実践 ……………	133
2.1 東京国立近代美術館アートライブラリを事例に……………	40	3.2.1 方針	133
2.1.1 はじめに	40	3.2.2 評価・選別・収受	135
2.1.2 東京国立近代美術館について	44	3.2.3 処理・保存	137
2.1.3 東京国立近代美術館アートライブラリについて	48	3.2.4 公開	149
2.1.4 アーカイブ	59	3.3 ミュージアム・アーカイブズの普及のために ……………	154
2.1.5 美術図書館のネットワーク	69	3.3.1 デジタルアーカイブズ・スペシャリストの育成	154
2.1.6 おわりに	70	3.3.2 おわりに	156
2.2 情報資源組織化の流れ……………	71	▶ コラム3 アーカイブの実務を学ぶ(松山)	171
2.2.1 はじめに	71	▶ コラム4 国立美術館におけるデータ公開・利活用(岡本)	178
2.2.2 情報資源組織化の目的と意義	71		
2.2.3 図書	83	4章 ドキュメンテーション	
2.2.4 展覧会カタログ	86	—————作品の歴史情報とその資料の集成—————(黒澤)——	186
2.2.5 雑誌	89	4.1 イントロダクション ……………	186
2.2.6 非図書資料	97	4.2 ドキュメンテーションとは ……………	189
2.2.7 おわりに	98	4.2.1 フランスの美術館における「ドキュメンテーション」	189
▶ コラム2 展覧会記録の利活用(長名)	102	4.2.2 博物館学における「ドキュメンテーション」との 関わり	193
3章 ミュージアム・アーカイブズ —————(松山)——	108	4.2.3 「コレクション・マネジメント」との関わり	195
3.1 ミュージアム・アーカイブズとは何か……………	108	4.3 作品の歴史情報とその資料とは ……………	197
3.1.1 アーカイブズの定義	108	4.3.1 来歴	198
3.1.2 SAAとミュージアム・アーカイブズ・ガイドライン	114	4.3.2 展示歴	200
3.1.3 ミュージアムの活動記録を管理する	121	4.3.3 文献歴	201
3.1.4 レコード・マネジメントとアーキビスト	127	4.4 事例紹介 ……………	203
3.1.5 コレクションとしてのアーカイブズを管理する	129	4.4.1 オルセー美術館	203
		4.4.2 オランジュリー美術館	206

4.4.3	国立西洋美術館	210
4.4.4	アーティゾン美術館	214
4.5	まとめ	225
▶コラム5 国立国会図書館における博物館・美術館刊行物 (曾木)		
		231
5章	ミュージアムの中の情報連携	236
5.1	なぜMLA連携はAM(L+A)から始まるのか? ——「作品の「生命誌」を編む」をめぐって……(水谷)……	236
5.2	東京国立博物館資料館と情報連携事例……(山崎)……	241
5.2.1	東京国立博物館の歴史	241
5.2.2	資料館概要	242
5.2.3	内部のMLA連携事例——資料館の立場から	247
5.2.4	課題	251
5.3	東京国立博物館百五十年史編纂事業に関わる活動と 情報連携事例……(小野)……	253
5.3.1	東京国立博物館百五十年史編纂室について	253
5.3.2	百五十年史編纂室の活動	254
5.3.3	百五十年史編纂室の保管資料と活用状況	258
5.3.4	内包的MLA連携事例——編纂事業に向けた 博物館活動記録の情報資源化という観点から	262
5.3.5	課題	263
5.4	東京国立博物館における情報連携事例から見る ミュージアム情報の流通……(阿見)……	264
5.4.1	ミュージアムにおける情報とその連携	265
5.4.2	内包的MLA連携	270
5.4.3	外接的MLA連携	275

5.4.4	作品をめぐる情報の流通整備	276
▶コラム6 ジャパンサーチでのMLA資料キュレーション (阿見)		
		281
あとがき		
		287
参考図書案内		
		289
さくいん		
		295

あとがき

2013年6月17日、当時筑波大学図書館情報メディア系にいらっ
しゃった水嶋英治先生の研究室で初の編集会議が開かれました。第
1巻『ミュージアムの情報資源と目録・カタログ』はほぼ順調に
2017年の1月早々に刊行されましたが、第8巻になる本書『ミュー
ジウム・ライブラリとミュージウム・アーカイブズ』はとうとう初
回の会議から約10年の歳月を経てしまいました。このような大幅
な遅延はひとえに本書担当の編者の不手際によるものであります。

一つお詫びしなければならないのは、この書名にかかわらず
ミュージアムの全般に話を及ぶことが叶わなかったことでありま
す。本書の全5章が美術館（東京国立博物館を含み）に偏ったこと
も、同じく、ひとえに編者の知縁知見にもとづいて、章構成を再編
したからにはほかありません。

ただ、本編の5章にわたる3美術館と1博物館からの報告により
ます『ミュージウム・ライブラリとミュージウム・アーカイブズ』
の内容は、ミュージアムの館種の違いを超えて、十分に応用の利く
知恵と実践に富み、参考とされるに足る問題意識に貫かれているこ
とは保証いたします、と自負を持って言えるのであります。

かつて16世紀のコンラート・ゲスナーが『世界書誌 (*Bibliotheca
universalis*)』をめざしたように、遍く資料へのアクセスを可能に
するためには、その書誌的記述の網羅をめざさなければなりません。
MoMAのライブラリのクライブ・フィルポットさんが指摘した
ように（本書 p. 27）、それは決して巨大な一館（モノリス, mono-
lith）によって達成完結するのではなく、コレクションの大小にか

かわらず、多数の「ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ」という部分が連携し、結集することによってのみ達成できることなのだと思います。しかもミュージアムにアーキビストが居ること自体がまだまだ稀なことであるし、いまでも多くのミュージアム・ライブラリを支えているのが、ジェーン・ライト (p. 17) と同じワンパーソンのライブラリアンであることを思えば、ミュージアムのライブラリアンであれアーキビストであれ、個人が部分のまま全体に連結する回路こそ必要であることは重ねて確認しておかなければなりません。

またミュージアムの中のライブラリとアーカイブズがより活性化するためには、ミュージアムの主役たるコレクションやその展示との間に橋を架け、知識と情報の往還が常にこの MLA のトライアングルの中で、血脈のごとくにフレッシュな流れと協働の志向が巡ることの肝要さも、繰り返し確認されるべきであることは、また同じでありましょう。6編のコラムもまたそのことを雄弁かつ多様に語っていませんでしょうか。

美術館から発せられた本書に続けて、さらに歴史・考古・自然科学ほか多様なミュージアムの中のライブラリやアーカイブズの実践と理念が語られる次なる一冊が新たに誕生することを切に願っております。それがまた「ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ」のさらなる切磋琢磨につながることでしょう。

2023年3月

編著者 水谷長志